

平成18年度 研究論文

研究主題

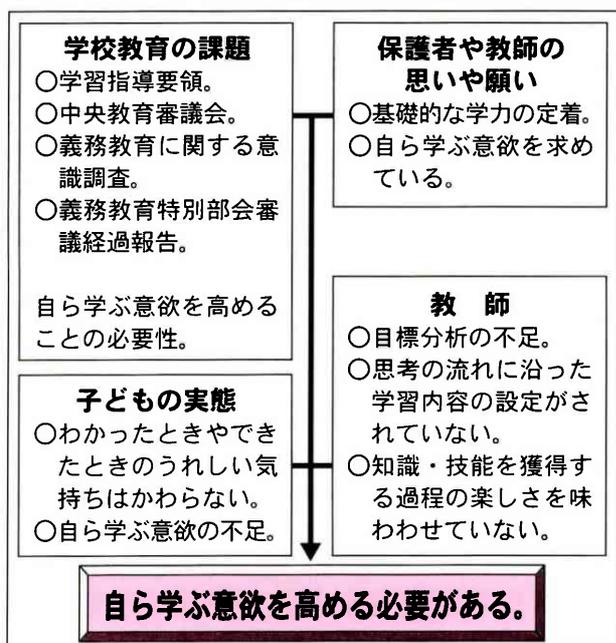
自ら学び続ける授業の創造

I	研究の目的	1
1	研究の背景	1
2	研究の方向	2
II	研究内容	3
1	自ら学び続ける授業とは	3
(1)	自ら学び続けるとは	3
(2)	自ら学び続ける授業とは	4
2	自ら学び続ける授業創造の基本的な考え方	5
(1)	自ら学び続ける子どもの姿の設定	5
(2)	自ら学び続けるための学習内容	6
(3)	自ら学び続けるための指導方法	7
III	研究の方向	7
1	研究の手順と方法	7
2	研究計画	8
IV	研究の成果と課題	8
1	研究の成果	8
2	研究の課題	8

本研究は、「確かな学力」を確実に身に付けるために、自分の考えをもち、学ぶことに夢中になって、学び続ける授業を目指している。そのために、自ら学び続ける具体的な子どもの姿や学びがいのある学習内容を設定し、個に応じて教材の特性を生かした指導方法の在り方を探っていく。そこで本年度は、具体的な子どもの姿を設定した。

I 研究の目的

1 研究の背景



【図1 研究の背景】

足度は学年が進むにつれて低下するという報告もある。さらに、保護者や教師は学校教育に教科の基礎的な学力と、自ら学ぶ意欲を求めている等の報告がなされている。

子どもたちの様子を見ても、新しいことを知りたいと思う気持ちや、分かたりできたりした時にうれしいと思う気持ちは、全ての子どもが持っている。また、教師も、「わかる・できる授業」を展開しようとしている。それにもかかわらず、子どもたちが自ら学ぼうとしないことが多々ある。その原因として、次のこと等が考えられる。

- 教師が目標分析を十分に行っておらず、全ての子どもが満足できるまとめができない場合もある。
- 子どもの思考の流れに沿った学習内容が設定されていない場合もある。
- 教師が、知識・技能を獲得する過程での楽しさを十分味わわせていない場合もある。

このようなことを考えると、子どもが自ら意欲的に学ぶためには、教師が目標分析を十分に行い、学びがいのある学習内容が設定され、子どもが自ら考える指導方法が充実している授業を展開する必要があると考える。

平成11年度に改訂された学習指要領が完全実施されて5年目となる。その間、学力についての論議はさまざまな所で行われている。しかし、一人一人が自ら意欲的に学ぶような学びの様相については、まだ研究の余地があると考えられる。

平成17年度中央教育審議会「義務教育特別部会審議経過報告」では、将来の職業や生活への見通しを与え、学ぶことや働くこと、生きることのよさを実感させる教育を充実し、自ら学ぶ意欲を高めることが重要であると述べている。また、「義務教育に関する意識調査」によると、授業中の子どもは新しいことを知るのが楽しいと思っているが、学習に対する満



自ら学ぶ意欲と基礎的な学力の定着。

2 研究の方向

このような研究の背景を基にしながらこれまでの研究を考えると、これまで本校は、「思考力・判断力・表現力」の発達特性を明らかにしてきた。また、その発達特性と「知識・理解・技能」の系統性を基に、学習内容についての研究をしてきた。その結果、「わかる・できる」喜びや楽しさを味わっている子ども像がはっきりし、研究したほぼ全ての領域において学習内容を設定でき、問題解決の過程にあった指導方法を具体化することができた。しかし、子ども一人一人に目を向けてみると、全員が自ら意欲的に授業に参加しているとはまだいえない状況もある。その原因を学習過程で子どもの側から分析してみると以下のようなことが考えられる。

「わかる・できる」喜びや楽しさを味わっている子ども
「なぜ、わかったのか」と問われた際に、学び取った結果だけでなく、その過程において起こったことや参考になった意見を結び付けて説明したり、他の場合に当てはめて説明したりすることができる。

目指すのは自ら学び続ける子どもを育てる授業

- ア 共通の問題意識をもち、問題を解決していく見通しがもてない。
- イ 情報を収集する力が不足して、情報不足のため意見が出にくい。
- ウ 事実を基に、比較したり、関係付けたりする能力が不足している。
- エ 「発見する喜び」「わかる喜び」「できた喜び」等の喜びの体験が少ない。
- オ わかった過程を説明する等、自分なりの論理を構築できない。

教師の側から分析してみると次のようなことが考えられる。

- ア 子どもが学び続けることができるような学習内容を十分に検討できていない。
- イ 授業中に、全員を同じ話題にのせる手立てが講じられていない。

本研究では、前研究の成果を踏まえ、子どもが自ら意欲的に授業に取り組む研究を行っていく。つまり、自ら学び続けることのできる子どもを育てる研究である。

そのような子どもを育てるためには、まず、「関心・意欲・態度」「思考力・判断力・表現力」「知識・理解・技能」の各観点を基に、授業の各場面で自ら学び続ける子どもの姿を具体的に明らかにする必要がある。次に、自ら学び続けるためにはどのような学習内容が必要なのかを、昨年度までの研究を基に検証して分析し、学習内容を付け加えたり削除したりして、子どもにとって学びがいのあるものになるように新しく設定し直す必要がある。また、その際に、指導方法も充実していくようにする。このような研究をすることにより、各教科、各単元において自ら学び続ける子どもの姿がはっきりし、そのためにはどのような学習内容や指導方法が必要なのかを把握して授業に臨めるようになる。以上のことを踏まえて、次のような研究主題を設定した。

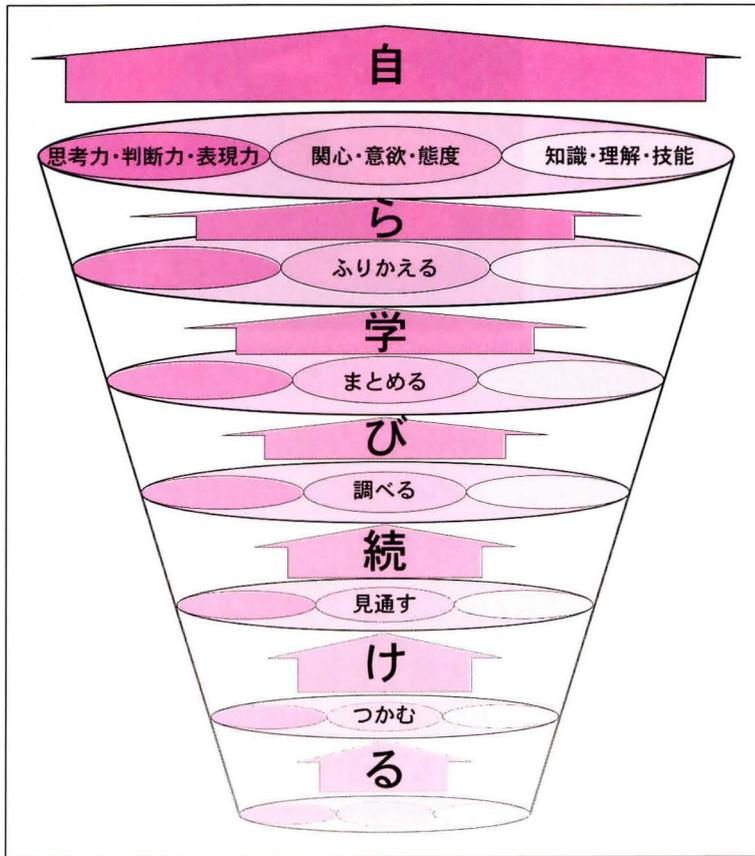


自ら学び続ける授業の創造

II 研究内容

1 自ら学び続ける授業とは

(1) 自ら学び続けるとは



【図2 自ら学び続けるとは】

自ら学び続けるとは、「確かな学力」を身に付けるために、自ら問題解決に意欲的に取り組むことである。つまり、「確かな学力」を身に付けるために授業の過程に見える子どもの姿と、結果として「確かな学力」が身に付いた姿のことである。

授業の過程に見える子どもの姿とは、1単位時間あるいは単元レベルにおいて、学ぶ意味を理解し、見通しや自分の考えをもち、自分の力で問題を解決しようと「思考力・判断力・表現力」等を駆使し、あれこれ試行錯誤しながら考えたり、何度も練習したりして自ら問題解決に取り組むことである。結果として「確かな

な学力」が身に付いている姿とは、「知識・理解・技能」等が身に付いたことであり、わかる喜びや達成感を実感できたことである。さらに、それを原動力に新たな疑問を見付けようとするのである。

この自ら学び続ける子どもの姿は、「関心・意欲・態度」の観点で見取ることができる。「関心・意欲・態度」とは、ブルームの「情意的領域の対比」を参考に考えると、態度として表れる状態のみを言っているのではなく、内面的な部分の「思考力・判断力・表現力」「知識・理解・技能」が絡み合って表出される低次から高次に至る情意的で連続的な力である。

学習過程	関心・意欲・態度の段階	関心	意欲	態度
つかむ	意識を集中させる段階 「〇〇に目を向ける」 「〇〇を注意深く観察する」			
見通す 調べる	何らかの反応を行う段階 「〇〇について発言する」 「〇〇について進んで調べる」			
まとめる	自分なりの価値を見つける段階 「〇〇のよさを見つける」 「〇〇のよさを認め進んで〇〇する」			
ふりかえる	体系化して説明できる段階 「〇〇について自分で目標をもって学び続ける」 「〇〇について工夫しながら最後までできる」 「自分のやったことを説明できる」			

参考 S. ブルーム 情意的領域の対比

【図3 関心・意欲・態度の段階】

自ら学び続ける子どもの姿とは、具体的には次のような姿である。

確かな学力を身に付けるための自らの意欲的な取組。

〔つかむ段階〕

- これまでの経験や事象提示，試しの活動等を基に，自分で問題を設定できる子ども。
- 「何のために何を学ぶのか」学ぶ意味が理解でき，説明できる子ども。

〔見通す段階〕

- 予想を立てて解決方法を見い出せる子ども。
- 「どうなると思うか」学ぶ見通しや手順を説明できる子ども。

〔調べる段階〕

- 解決したい問題を，自分なりの力で試行錯誤したり，失敗したりしながら追究することができる子ども。
- 自分のやっていることを説明できる子ども。

〔まとめる段階〕

- 自分なりの考えをもち，自分なりの方法で表現でき，共にみがき高め合うことを通して，わかる喜びやできる喜びを実感できる子ども。

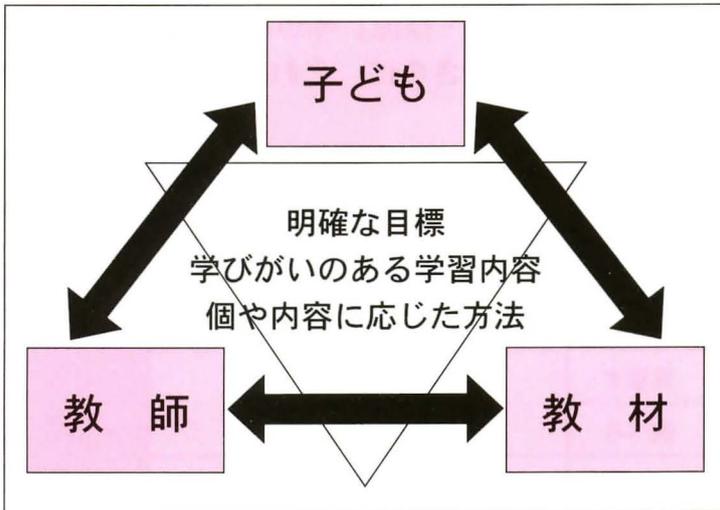
〔ふりかえる段階〕

- わかった過程を説明でき，やる気と自信がもて達成感を認知できる子ども。



(2) 自ら学び続ける授業とは

自ら学び続ける授業とは，具体的には次のような授業である。



【図4 自ら学び続ける授業とは】

このように，身に付けさせたい目標が明確にあり，学びがいのある学習内容が設定され，個や内容に応じた指導方法が工夫された授業を繰り返し行うことにより，自ら学び続ける子どもが増えていくことになる。また，振り返りの場をつくり，学び終えた喜びや満足感を味わわせることも大切である。

- ア 子どもにどのような力を身に付けさせるかが明確で，内容の系統性を踏まえ，子どもが試行錯誤しながら解決できそうな目標が設定された授業。
- イ 子どもにとって達成感を味わえる学びがいのある学習内容を含んだ授業。
- ウ 一人一人に応じたり，内容に応じたりして学習方法を工夫し，評価し，指導していける授業。

2 自ら学び続ける授業創造の基本的な考え方

(1) 自ら学び続ける子どもの姿の設定

自ら学び続ける授業を展開するには、「自ら学び続ける子どもの姿」を具体的に各單元ごとに設定する必要がある。具体的な子どもの姿を設定するには、自ら学び続けるために、その基となる「関心・意欲・態度」「思考力・判断力・表現力」「知識・理解・技能」について探る必要がある。自ら学び続ける子どもの姿を学習過程で考えてみると、それぞれの力が絡み合って発揮され、場合によっては、「知識・理解・技能」が大きく働くこともあれば、「思考力・判断力・表現力」が大きく働いていることもある。それは、学習過程や教科等の内容によって違いが出てくる。学習過程での違いを理科の5年生単元「てこのはたらき」を例にとると次のようになる。



分析し各單元毎に具体的に設定。

理科 5年生単元「てこのはたらき」における具体的な子どもの姿

1 「つかむ」段階 「意識を集中する」段階

- 20 kgのおもりを持ち上げるときに、力点に働く押す力の変化を感覚的にしか説明できないことに気づき、数量化する必要性に気付く。 【知識・理解】



「とても重かった。」
「あれ、とてもってどれくらい重さかな。」

2 「見通す・調べる」段階

「何らかの反応を行う」段階

- 小指で押す力を友達に伝える方法について自分なりに考えたり、友達と意見交換したりしながら解決への見通しをもつ。 【思考力】



「つり合う物を棒にかけよう。」
「水の入ったペットボトル何個分くらいかな。」

- 力点に働く力を数量化するために、てこがつり合うときの位置や重さを調整しながら調べる。 【技能】



「支点はちょうど真ん中だ。」
「支点から力点までは50 cmだ。その時は2本分だよ。」

3 「まとめる」段階

「自分なりの価値を見付ける」段階

- 支点までの距離と力点に働く力との関係を調べた実験結果を、表などで整理し、自分の予想や結果、友達の結果と照らし合わせながら考える。 【技能】【思考】



「あれ、支点から力点までの距離が遠くなるとペットボトルの本数が減っている。」
「僕の表もそうなっている。」

4 「ふりかえる」段階

「体系化して説明できる」段階

- わかった過程を振り返り、力点に働く力を数量化することのよさに気づき、てこの力点に働く力を説明する際に生かす。 【知識・理解】



「支点から力点までの距離が2倍になると力点にかかる力は1/2になるんだ。」

また、教科等での違いを例に挙げると社会科、算数科、理科科等では「思考力・判断力・表現力」を発揮しながら、最終的には「知識・理解」の部分を確実に獲得する必要がある。図画工作科や音楽科等では、「思考力・判断力・表現力」を発揮し、「知識・理解・技能」を大切にしながらも「表現力」の高まりを育てていくことになる。各教科等の「まとめる」「生かす」段階における、自ら学び続けている子どもの姿の例を挙げてみる。

例1 理科 4年生単元「月と星」における具体的な子どもの姿

- 月の形が変わるのは、太陽、地球、月の位置が関係していることがモデルを使い自分の言葉で説明できる。
- 実際の太陽の大きさと地球との距離が理解でき、図や言葉で説明できる。



「ここは半月だ。ここは三日月に見える。」
「月を見る場所によって形が変わる。」



「太陽ってこんなに大きいんだ。」
「とっても離れているから月と同じ大きさに見えるんだね。」

例2 音楽 2年生題材「リズムで遊ぼう」における具体的な子どもの姿

- 友達に、拍の流れにのり、正しい音程で歌っている自分たちの声を聴いてもらおうと、演奏を発表する。



「練習でやったように、みんなでリズムや音に合わせて歌おう。」

- 友達はどうなリズムで工夫したのかを考えながら聴き、意見を発表する。

「○○さんは難しいリズムだったけどリズムにのって歌ってました。」

- 難しかったけれど、できるようになったリズム等について、感想を発表する。

「ぼくは、ダックスフンドという長い名前だったけど、リズムをあてはめることができました。」

(2) 自ら学び続けるための学習内容

本校では、子どもが学び取るもの全てを学習内容ととらえている。学習内容は、子どもの発達特性や授業における学びの姿から内容を吟味し、必要ならば学習指導要領の内容に加えて設定している。前研究において、ほぼ全ての領域において「わかる」「できる」ための学習内容を設定することができた。しかし、全員が意欲的に授業に参加できていない現状もある。そこで、本研究では、前研究で設定した学習内容を基に、一人一人の子どもが自ら学び続けることができるように、その子ど

もにとって問題意識と見通しがもて、試行錯誤しながら達成感を味わえるような学びがいのある、個に応じた学習内容を設定していく必要がある。

学習内容の設定に当たっては、前研究で「思考力・判断力・表現力」の発達特性と、「知識・理解・技能」の系統性を基に設定した学習内容を実践しながら、自ら学び続ける子どもの姿を見取り検討を加えていく。自ら学び続ける子どもの姿に現れる内容的な部分が、学習内容になり得る部分であると考えている。

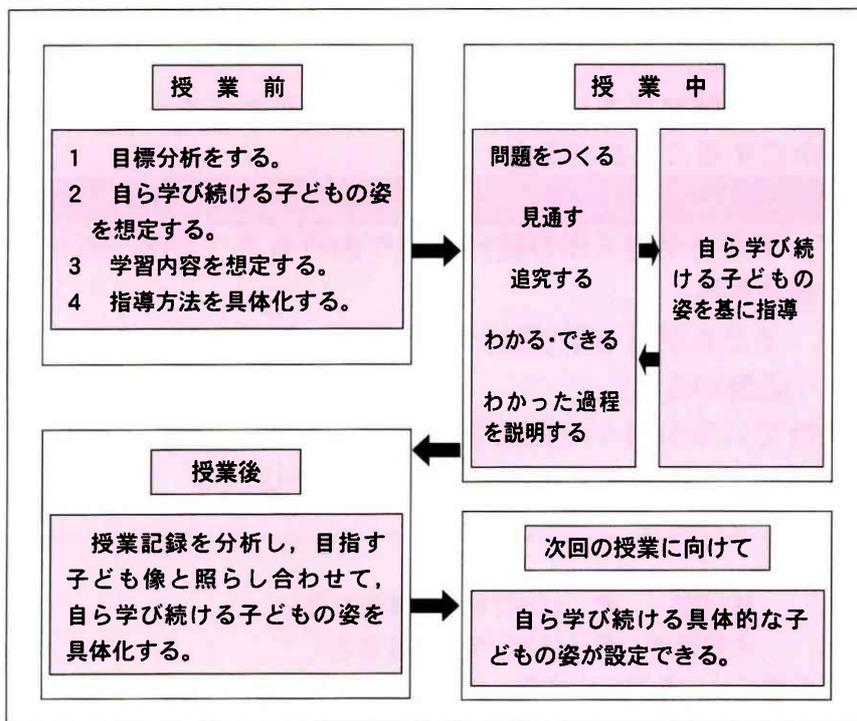
(3) 自ら学び続けるための指導方法

自ら学び続けるためには、目標を設定して学びがいのある学習内容を設定するのはもちろんのこと、全ての子どもが自ら学び続けるように単元の特性や個に応じた指導方法の工夫を行う必要がある。指導方法は子どもの発達特性を踏まえながら、単元や題材、教材に応じて考えていく。また、学習過程に応じて考えていく必要もある。さらに、自ら学び続ける子どもになっているかを見取るための、評価の観点、方法、評価後の指導・支援の仕方等についても考えていく必要がある。自ら学び続ける子どもの姿とその基になる力が、評価の観点になると考えている。

最後に、学び終えた喜び等の満足感を味わうことができる自己評価などの振り返り方も考える必要がある。

Ⅲ 研究の方法

1 研究の手順と方法



【図5 研究の手順】

研究を進めるに当たっては、子どもたちが自ら意欲的に学んでいけるような授業を目指す。そのためにまず、授業前に単元の目標分析を行い、自ら学び続ける子どもの姿を具体的に想定する。次に、前研究で設定した学習内容に沿って実践を進めたり、子どもにとって学びがいがあると想定した学習内容を基に実践したりして、授業の記録をとり、子ども一人一人が自ら学び続ける

ことを想定した子どもの姿を基に見取っていく。その際、自ら学び続けている子どもについては、その原因を分析する。また、そうでない子どもについては、設定した目標に照らし合わせて、何が足りないのかを判断し、新しい学びがいのある学習内容を設定したり、指導方法を変更したりしていく。そうすることにより自ら学び続ける子どもの姿が設定できる。それを繰り返すことによって、自ら学び続ける授業が多くなる。

本年度は具体的な子どもの姿を設定。

2 研究計画

重点を明らかにして実践。

研究の期間は3年間を考えている。1年次は、研究の基本的な考え方の構築と自ら学び続ける子どもの姿を全単元で設定し、目標研究を重点化した。そうすることにより、教師が授業をする際に、幾通りもの子どもへの指導や支援があることがわかったり、学習内容の設定や指導方法の有効性を検証したりすることができる。2年次は、

	1年目	2年目	3年目
子どもの姿	■		
学習内容	■	■	■
指導方法	■		■

【図6 研究の計画】

前年の研究を基に自ら学び続けることのできる学習内容の考え方を構築し設定することを重点化していく。3年次は、自ら学び続けることができる学ばせ方や評価の在り方を重点化していく。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 「自ら学び続ける授業創造」の基本的な考え方が明らかになった。
- 研究を基に実践した単元や題材において、自ら学び続ける子どもの姿が現れる学習内容を設定することができた。
- 研究を基に実践した単元や題材において、自ら学び続ける子どもの姿が現れる指導方法の有効性を明らかにすることができた。

2 研究の課題

- 全ての単元において、子どもが自ら学び続ける姿が表れるような学びがいのある学習内容を設定する必要がある。
- 全ての単元において、子どもが自ら学び続けるために、教材の特性や個に応じた指導方法を充実していく必要がある。
- 子どもが自ら学び続けているか個々の状況を把握し、指導に生かせる評価や、子ども自身が達成感を味わえる自己評価の在り方を探る必要がある。

【参考文献及び資料】

「教育評価」

梶田叡一 著（1997年 有斐閣双書）

「子どもの学力とは何か」

永野重史 著（1999年 岩波書店）

「教育展望 臨時増刊 No.37 転機に立つ教育への挑戦－創造と発展－Ⅱ」

財団法人教育調査研究所 編著（平成17年 教育調査研究所）